

レストラン ジョウトウ

鹿児島県行政書士会
会長 鎌田 敬



専門士業団体
協議会から

私は昭和28年の3月に沖縄のコザ市(現沖縄市)で生まれた。両親は鹿児島県沖永良部島和泊町の出身で、当時コザの黒人街でレストランを経営していた。

その名もレストラン ジョウトウ(上等) RESTAURANT JOTOであった。周囲のレストランの名前が、ハッピー、セブン、ローリング20という中で、ジョウトウの名前は異彩を放っていた。コザは嘉手納エアホースの基地の街で、ゴヤ十字路が白人街、コザ十字路が黒人街となっていた。ベトナム戦争が始まり、終わるまでの時期で、アメリカ兵が最も多かった時代であった。アメリカ兵の部隊は4つあり、マリン、ネイビー、アーミー、エアホースで毎月15日と30日がペイデイ(給料日)になるため、その日は朝の明け方まで街中に兵隊が溢れ、レストランやバーが終夜営業をしていた。

兵隊達は給料を貰うと時計やトランジスタラジオを買い、街のテラーであつらえの背広を作る。そしてバーで酒を飲み、レストランで食事をする。貰った給料がなくなると、買った時計とラジオをポーンショップ(質屋)に持ち込んで換金をして遊ぶ、その金もなくなるとバーで飲み逃げをし、レストランで食い逃げをする。兵隊達の飲み逃げ、食い逃げは日常茶飯事で、逃げる兵隊の後ろをバーのホステスやレストランのウェイトレスがマネー、マネーと叫びながら追いかけた。周囲にいる兵隊達は、明日は我が身とばかりに、逃走する兵隊を助けた。逃げきる兵隊の背中にはサナバビッチ、ガッデムと罵声が浴びせられた。そして夜も更けると酔っ払った兵隊達があちこちで喧嘩を始める。するとMP(憲兵隊)が出動して暴れる兵隊達を捕まえて、兵舎へ連れて帰るのであった。兵隊達は、沖縄での休暇からベトナムの戦地に戻ると、生きて帰れるかどうか、明日をも知れぬ身になるので、街での遊びは徹底していた。コザの街の路上には酔っぱらいの喧騒に、バーやレストランのジュークボックスからリズム・アンド・ブルースの音楽が流れてきて、夜をも知れない騒ぎが明け方まで続いた。

私は物心ついた時には、レストランの作業場で皿洗いをしていた、そのうちに大きなバケツに山盛りになったジャガイモの皮むきをし、調理用に切りそろえる仕事をさせられた。新入りのコックより私の方が上手であったので、私専用の仕事になった。私が小学校に上がった頃、どういかわけか父がレストランでラーメンを売ることが思いついた。鹿児島から仕入れた中古の製麺機を、潰れたバーを借りて備え付け、製麺工場を作った。その日から私と父とで製麺工場でのラーメンの麵を作る日々が始まった。ラーメンは醤油味のスープを添えて丼に入れてレストランで出した。これが思わぬヒットメニューになる。黒人兵隊はそのラーメンに、コショウ、マスタード、ケチャップ、タバスコを好みで入れて、およそラーメンとは呼べない食べ物にしておいしそうに食べた。ラーメンはハンバーガー、チーズバーガー、ニューヨークステーキ、タコス、チリカン、フライライスに並ぶ人気メニューであった。おかげで私は毎日製麺工場で働いた。学校から帰ると山の

ようなジャガイモをむき、切り揃え、そのあとに製麺工場で麺を作る。たまに友達と遊んで遅く帰ると、夜中まで製麺工場で麺を作らないといけなかった。私が意外と手先が器用なのは、幼少期にせっせと働いたからである。

小学生であるのに職人のような日々を送っていた私であるが、六年の時に父に呼ばれ「お前は、このまま沖縄に居てもしょうがないので、中学からは鹿児島に行くように。」と言われる。私は、製麺工場での労働から開放されるうれしさで即座に承諾した。しかし、その時の父が言った真意は後年解ることになる。

私が生まれた昭和28年の12月に、沖縄と同じ米軍の占領下にあった奄美群島は、沖縄よりいち早く本土復帰を果たした。その時に沖縄の帝王である米軍の高等弁務官が、「奄美復帰の日より奄美に本籍のある沖縄居住者は外国人とする。」という命令を出したのである。沖縄と奄美は日本本土と隔絶されていたため、私の両親のように多くの奄美の人々が沖縄に職を求めて居住していた。

私と両親のような奄美の人達は、高等弁務官の命令により外国人となり、外国人登録の義務、公職からの追放、参政権の剥奪、土地所有の剥奪、公務員試験受験資格の剥奪、融資の制限等を受けることになった。そのため当時の琉球政府の行政副主席の泉有平、琉球銀行初代総裁の池畑嶺里、復興金融公庫総裁の宝村信雄、電電公社総裁の屋田甚助等々の各氏は奄美に本籍があるという理由で、それぞれの公職を追放されたのである。父はかような事情を憂慮して、私を鹿児島へ行かせたのであった。

私は外国人登録証と日本行きのパスポートを握りしめて鹿児島へ渡った。3畳ひと間の下宿に住み、沖縄ではどこでも売っているコルゲートの歯磨きとパルモリーブの石鹸を、山形屋デパートに買いに行くと、そんな物はないと言われてカルチャーショックを受けた。昭和40年の話である。

その後、沖縄が復帰した昭和47年に両親は沖縄を引き上げ、故郷の沖永良部島に戻った。故郷に戻った数十年後に父が他界をした時に母からこう頼まれた、「お父さんも亡くなった。今のうちに、沖縄でお世話になった人達にお礼が言いたい。だから一緒に沖縄に行ってくれ。」という。早速母と沖縄に渡り、レンタカーを借り、ホテルを泊り歩きながら、当時お世話になった人を探した。昔は不夜城のような歓楽街であったコザは、まるで無縁墓地のように見るも無残にさびれていた。当時コザでレストランとバーを何軒も持ち、大変な資産家だったその老婦人は、身寄りもなく老人ホームに身を寄せていた。母はその人に会うと手を取り合って喜んだ、そして「今の自分があるのは、みんなあなたのおかげだ。本当にありがとう。」と何度もお礼を言った。

私は母との沖縄旅行ではじめて、両親が沖縄で大変な苦勞をしていたことを知った。奄美の人というだけで、銀行は融資をしてくれなかった。「とても苦勞をしたけど、まわりに居た沖縄の人達が助けてくれた。だから今のあなたがある。そばに居る人が助けてあげるのが一番大切なことだ。」と昔の苦勞を思い出すたびに言った。

当会行政書士会は、現在いくつもの無料相談会をしている。外国人無料相談会、障がい者無料相談会等である。無料相談会に参加して外国人の悩みを聞いていると、「そばに居る人が助けてあげることが一番大切なことだ。」という母の言葉を思い出す。

その母も数年前に他界した、大切な遺産を貰ったと思う。